

『アーサー・ラザフォード氏の甘やかな新婚生活』

著：名倉和希

ill：逆月酒乱

バスルームは二つあり、アーサーは時広のベッドルームに近い方へと連れて行ってくれた。

「私がやってあげよう」

言い出すと予想していたから、「自分でできるから、大丈夫」とお断りを入れる。

「でも私の責任だ」

「アーサーはキッチンを片づけて。その.....汚しちゃったのは僕だけ」

「いや、そっちも私の責任だ。片づけておこう」

「それに、もうすぐケータリングが届くんでしょう？ それを受け取ってくれないと」

「.....そうだな。だが.....」

完全には納得せずに、不服そうなアーサーが、本気で「責任を取る」ためだけに時広を洗いたがっているわけではないと知っているから、譲らなかった。今まで何度も洗われてきた。過度なセックスに疲弊して指一本も動かさなくなることがあり、そういうときはアーサーが時広をバスルームに運んで隅から隅まで清めてくれるのだ。

後ろに指を入れられ、体液をかき出されるときに羞恥といったらない。「やめて」と懇願しても、アーサーはだいたいやめてくれなかった。時広は嫌がりながらも感じて悶えて泣いているのを、楽しそうに眺めるのが常だ。ひどい人だと詰っても、心からそう思っているわけではないから、アーサーは「かわいい」とわけのわからない感想を漏らして微笑むだけ。

「いいから、アーサーは向こうをお願い」

「.....わかった」

渋々といった感じを隠すことなく、アーサーは洗面台にメガネを置き、バスルームから出て行く。時広はホッとしてシャツを脱ぎ、白いバスタブにそろそろと入った。シャワーでざっと体を洗い、後ろも洗い、バスタブに湯をためて座りこむ。

「あー、気持ちいい」

やっぱり湯に浸かるとリラックスできる。初めての海を越えての長時間移動は、予想していた以上に心身に疲労をもたらしていたようだ。バスルームの高い天井を見上げる。窓はなく、当然のようにトイレも一緒になっていた。シャワーカーテンはステンレス製とおぼしきパイプから下げられていて、とにかくすべてのもののサイズがアーサー規格だ。つまり、大きい。

「.....本当にアメリカに来ちゃったんだな.....」

しみじみと思った。飛行場からここまで、移動の車から景色を眺めていてもなんだか現実感がなかった。まるで映画のスクリーンを見ているような気分だったが、こうして新居でバスタブに浸かっていると、ゆっくり現実が染みこんでくる。まさか初日にキッチンでセックスしてしまうとは思ってもいなかったけれど。

さっきまでの自分の乱れっぷりを思い出すと、せつかく落ち着いていた全身がカッと熱くなってしまう

いそうだったので、両手で湯をすくってバシャバシャと顔を洗った。

あまりゆっくりしている時間はない。時広はバスタブから出て、備え付けの棚からバスローブを取り出した。ふかふかの白いバスローブは、袖を通してみると時広にぴったりのサイズだった。たぶんキッズサイズなので、あえてラベルは確認しない。

アーサーが洗面台に置いてくれたメガネをかけ、鏡に映る自分をしばし見つめた。とくに美男子でもない、ごく普通の日本人がそこにいる。太れない体質で、こここのところの移住に関する雑事でストレスが募っていたのか、自覚がないままに少し痩せてしまっていた。あまり痩せるとアーサーが心配するし、きっと抱き心地が悪くなるだろう。ここまで来て、アーサーに嫌われるのだけは避けたかった。アーサーはもともと時広のような小柄な男ではなく、自分と同程度くらいの体格の男性が好みのタイプだったらしいから。

「……やっぱり、子供にしか見えないんだろうな……」

アーサーも、じつは初対面のときに時広を子供だと思ったらしい。会社の秘書課に頼んでいた日本語教師にはとうてい見えなかったと、ずいぶん後になってから話してくれた。

「僕なんか連れて帰国して、アーサーは大丈夫なのかな」

アーサーは会社や友人たちにカミングアウトしているゲイだ。日本から恋人を連れてきたなんて話が知れたら、みんなは時広を見て失望するかもしれない。「そんなことは君が気にする必要はない」とアーサーに一蹴されたけれど、自分のせいでアーサーが周囲の人に呆れられたり嫌われたりしたら悲しい。

「でも、外見は今さらどうにもならないんだよね」

ため息がこぼれる。

空港での入国審査には、ちょっとばかり時間がかかった。パスポートには二十八歳であることを示す生年月日が明記されているのに、目の前にいる時広がどう見てもティーンエイジャーなものだから、すんなりと通してもらえなかったのだ。アーサーと一緒にいて説明してくれたから事なきを得たけれど。

いつまでも鏡に映る自分を見ているわけにはいかないので、バスルームから自分に与えられた部屋へ行った。クローゼットの中から、適当に衣類を選ぶ。東京にいるあいだにアーサーにたくさん服を買ってもらった。それらが綺麗に収められている。下着と、初夏らしいコットンシャツとジーンズを出して手早く身につけた。

窓にかかっているロールカーテンを開けて、ちょっと覗いてみる。

「わあ……アメリカっぽい……！」

バカみたいな感想だが、それが心からの言葉だった。

窓からは日本ではない街並みが見えた。部屋は五階にある。真下の通りを挟んだ向かい側はレンガの外壁がレトロっぽいビルで、一階は店舗、二階以上は住宅のようだ。この周辺には古いビルが多いと聞いた。この建物も築年数は古いらしい。ただし内部はそうとうリフォームされていて、キッチンもバスルームも新しくピカピカだ。

「国連本部って、どっちの方角？ 後でアーサーに教えてもらおう」

これから当分の間はここに住むのだ。地理とか店とか、交通網とか、周辺のことを覚えなければならない。それに、ここで自分がなにをするのかも――。

私立高校の英語教師を辞めてから、もう十カ月になる。同僚の男性教師・柴田にゲイだとばれて言い寄られ、断ったらストーカーされた。職場の上司である校長や教頭に相談したが解決せず、その後、拉致監禁されて刑事事件にまでなってしまう、時広は心身ともに傷ついた。去年の七月に学校を去ったときは、なにもかもに絶望していた。

子供の頃に両親を亡くし、一緒に暮らしていた祖母を三年前に亡くしていた時広は、天涯孤独の身の上だった。ひどい孤独感に苛まれても自棄にならなかったのは、祖母が大切に育ててくれた自分を粗末に扱いたくなかったからだ。それに、支えてくれた友人たちもいた。

その友人の一人、角野大智は、とても親身になってくれて、無職になった時広に仕事を紹介してくれた。大智は外資系保険会社日本支社の秘書課に勤務している。紹介してくれたのは、日本支社にあたらしく支社長としてやってくるアメリカ人に日本語を教えるという仕事だった。

日本語を外国人に教えるなんて未経験だったが、必要なのは英語のスキルの方で、雇われている間はそのアメリカ人が宿泊しているホテルに泊まると聞いて飛びついた。祖母が遺してくれた一軒家に愛着はあったが、柴田に知られている自宅にひとりで寝泊まりするのが怖かったからだ。柴田は有罪判決を受けたが執行猶予付きで、親戚監視のもとカウンセリングを受けて治療しているはずだったが、拉致監禁されていたときの記憶はまだ薄れていなかった。ホテルならば常に従業員がいるし、なにかあったらフロントに知らせればいい。なによりも柴田が来襲するかもしれないという恐怖がなくなる。

緊張しながらホテルに赴いた時広を待っていたのが、アーサーだった。

時広はほとんど一目惚れだったが、住む世界が違いすぎる人だし、なんの魅力もない自分が好かれるはずがないと諦めていた。ところが、アーサーは時広を好きになってくれた。

初めての恋人、初めてのセックス、夢のようなホテル暮らしの日々――。

アーサーは時広にとって恩人とも言える。愛される喜びと自信を教えてくれた。肉体の快樂も教えてくれた。そしてなによりも、あたらしい世界に連れてきてくれた。

「僕は、ここでなにができるだろう……」

アーサーが会社に行くのを見送り、ただひたすら帰りを待つだけの毎日だったとしても、それはそれで幸せかもしれない。けれど、時広はなにかをしたいと思っていた。

「できれば、仕事をしたいな」

でもアーサーは賛成してくれていないようだ。

ふたりで一緒に住むと決めたとき、時広は生活費をすこしでも負担したいと申し出たが、アーサーは「そんなことは考えなくていい」と苦笑いした。

「君は私のそばで、リラックスして過ごしてくれればいい」

アーサーは優しい。とても愛情深くて、いつでも時広を守ろうとしてくれている。心に傷を負っていた時広にとって、それは嬉しいことだったけれど、時広だって男なのだから、これからずっと守られ続けてアーサーにおんぶに抱っこ状態では不甲斐ないと思ってしまう。

ミッドタウン・イーストと呼ばれる地域にあるこのアパートメントの家賃が、いったいいくらなのか、アーサーははっきりと教えてくれていない。たぶん、高いだろう。国連本部が近くにあり、比較的治安が良い地区だ。日本食スーパーもいくつかあって、日本人が多く住むらしい。

グランド・セントラル・ターミナルまで徒歩で数分という立地の、常時ドアマンがいて館内にスポー

ツジムまであるアパートメント。2ベッドルームに2バスルームという広さ。インターネットでちらっと調べてみたら、一カ月七千ドルという金額が出てきた。びっくりしてぐらりと眩暈がしたが、そもそもアーサーはエリートで、詳しくは知らないが実家がかなり裕福らしい。なにせ日本でホテル暮らしをしていたくらいなのだ。このレベルの住居は普通なのかもしれないので、自分には分不相応だとかなんだとか、口出しするのははばかられた。

時広がどんなに頑張っても、生活費を折半するのは無理だろう。けれど、たとえ百ドルでも払いたい。男としての意地……もすこし入っているが、ふたりで暮らしていく意味を、そこに見出したいという気持ちを、わかってほしかった。

救いなのは、英語がわかることだ。海外は初めてだけれど、英語教師になるくらい真剣に勉強してきたので、普段の英会話にはまったく問題はない。その点についてはアーサーにも太鼓判を押されている。

時広は空を見上げた。晴れ渡った青い空が清々しい。ここで、この地で、アーサーとともに生きていくのだ。

「よし」

時広が拳を握って気合いを入れたところで、インターホンが鳴ったのが聞こえた。ケータリングが届いたのかもしれない。それとももうエミーが来たのかも。

時広は慌てて部屋を出て行った。



時広が二度目のあくびをしたところで、エミーが席を立った。

「そろそろ帰るわ。今夜は招待してくれてありがとう、トキ」

「エミー、いろいろありがとう」

時広も慌てて席を立ち、さっきエミーが渡したファイルを大切に撫でた。アーサーの有能な秘書は、ここでの生活がすこしでも円滑に進むようにと、頼んでもいないのに近隣の地図と日本食スーパーマーケットの詳細をファイリングして持ってきてくれたのだ。

(とても気が利く秘書だが……トキを喜ばすのは私の役目。時間さえあれば私がそのくらいやってあげたかった……！)

アーサーは心からの悔恨にぐっとテーブルの下で拳を握る。もちろん、笑顔を保ったままで。

エミーには不機嫌になったことを気づかれているだろうが、時広は良い意味で鈍いので、勘付かれないだろう。

「じゃあ、トキ、私はエミーを下まで送っていくよ」

「うん、わかった。僕はここを片づけておく」

「それは私が後でやるから、君はもう休みなさい。時差ボケで眠いだろう？ すこしワインを飲んだし」

「あ、わかった？ ちょっと眠い」

えへ、と時広が照れたように笑った。アーサーはズキューンと胸を射抜かれたような衝撃に硬直する。

（ああ、トキ……！ 君はなんて愛らしいんだ……！）

出会ってからもう十カ月にもなるというのに、いまだに時広のちょっとした表情やしぐさに魅せられてしまう。ふらりと両手が時広の方に伸びそうになったが、抱きしめてしまう寸前でハッと我に返った。

（危ない、危ない。エミーの前でトキに熱烈なくちづけをしてしまうところだった）

アーサーとしてはキスくらい人に見られてもかまわないのだが、時広にとっては重大な問題になるらしいので、人前ではなるべく恋人らしい行為はしないようにセーブしている。

「でもできるだけ片づけておくね」

そのままにしておいてくれればいいと強く命じれば時広はなにもしないだろうが、そこまで頑なに我を通すのもおかしな話で――アーサーは時広と恋人になってからずいぶんと人間が丸くなった――時広の気持ちを汲んで「私の分も残しておいてくれると嬉しい」という言い方をして、エミーとともに玄関を出た。

エレベーターに乗ってから、エミーがちらりと横目で見てくる。

「ボス、着いた早々、私に来る前に、トキに悪戯をしましたね。あの色気ダダ漏れは尋常ではありません」

「……………別にかまわないだろう。私たちは愛し合っている」

「それは承知していますが、トキは初めての長距離フライトだったはずですよ。ただでさえ疲れているところに、ボスの性欲をぶつけられては潰れてしまいますよ」

「トキはそう簡単には潰れない。それに、合意のうえでの行為だ」

「あたりまえです。ボスがトキをレイプしたなんて事態になったら、私は全力で軽蔑しますからね。そしてトキに腕の良い弁護士を紹介します」

「はいはい」

アーサーはうんざりしながらいい加減な返事をして顔を背けた。エミーの時広鼻息は日に日にひどくなっているような気がする。だが時広がキュートすぎて庇護欲をそそるのだから仕方がない。

エレベーターが一階に着いたので、ふたり並んでエントランスロビーを横切る。来客とちょっとした時間を過ごせるように、ロビーにはソファやテーブルがいくつか置かれていた。すでに夜になっているが煌々と照明がともり、とても明るい。変にムーディでないところが良い。もし時広に来客があった場合はここで話をするようにとっておこう、とアーサーは決めた。

「そういえば、ボス。トキはここでやりたいことを探すと言っていました。それはつまり仕事を探すということですか？ 土地勘がなくツテもない時広には難しいでしょう。ボスが探してあげたらどうですか。それとも私が知人に聞いてみまじょうか」

「……………私としては、トキに仕事をさせるのは、まだ早いと思っている。できれば一年くらいはのんびりしてもらって、この国に慣れてもらいたい。そのうちトキにもできる内容のもので、条件に合う職場があれば――と考えているが、トキは急ぎたいようだ。私に生活費のすべてを頼り、養われているような状態が心苦しいと言っていた。そんなこと、気にしなくてもいいのに。ぜひ頼ってもらいたい。トキのすべてを金で買えるなら、有り金はたいてでも買いたいくらいだ」

呆れた目をエミーが向けてきた。

「ボス……本当に人が変わりましたね。かつて、恋人には自立を求め、依頼心や依存体質を蛇蝎のごとく嫌っていたのに、トキに対してはそんなことを考えているんですか。まあ、東京での生活を見ていて予想はしていましたが……。トキは見かけが少年でも、中身は二十代後半の男性です。ボスに寄り掛かった生活を不自然だと感じるのは、とても健全な精神状態である証拠ですよ」

「それは、そうだが……。トキはあの事件後、半年間も悪夢にうなされていた。朝までぐっすり眠れるようになったのは、この二カ月くらいだ。私は二度とトキを危険な目にあわせたくない。もう、トキの心も体も傷つけないのだ」

それは切実な願いだ。時広は同僚教師に心身ともに傷つけられた。本人の努力とアーサーの愛情でずいぶんと回復したが、心の傷がすべて消えたわけではない。見えないだけで、残っているのだ。ささいなことがきっかけで事件の記憶が蘇り、傷口が広がるかもしれない。アーサーはそれを恐れている。

「あなたの気持ちはわかります。けれど、過保護にならないように、気をつけて」

「わかっている」

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>